

**第 63 回宮崎県学校体育研究発表大会
日向・東臼杵地区大会**

研究計画・内容

令和4年度 宮崎県学校体育研究発表大会日向・東臼杵地区大会 研究計画

1 宮崎県の研究主題

生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育む体育科・保健体育科学習
～主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業の創造と展開～

2 宮崎県部会別研究主題

○ 小学校部会主題

生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための
資質・能力の基礎を育む体育科学習の在り方
～主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業の創造と展開～

○ 中学校部会主題

生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための
資質・能力を育む保健体育科学習の在り方
～主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業の創造と展開～

○ 高等学校部会主題

生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを継続するための
資質・能力を育む保健体育科学習の在り方
～主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業の創造と展開～

○ 特別支援教育部会主題

生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための
資質・能力を育む体育科・保健体育科学習の在り方
～主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業の創造と展開～

3 主題の設定理由

(1) 新学習指導要領の趣旨

今回の改訂の基本的な考え方として、『①子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視する』『②知識の理解の質を更に高め、確かな学力を育成すること』『③体育・健康に関する指導の充実により、健やかな体を育成すること』などが挙げられる。

(2) 宮崎県の児童生徒の実態

令和3年度の全国体力・運動能力、運動習慣等調査では、小学校5年生男女、中学校2年生男女の体力合計点はそれぞれ全国平均を上回ったが、令和元年度に比べて、すべての学年で低下する結果となった。「上体起こし」「反復横とび」「シャトルラン」「50m走」は、ほとんどの学年で有意な低下を示した。また、クロス調査からは、体力の高い児童生徒は1週間の運動やスポーツの実施日数が多く、テレビやゲームなどの視聴時間(スクリーンタイム)が短いという結果が得られた。

(3) 宮崎県学校体育研究会が進める研究

本県では、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校における12年間の体育科・保健体育科学習を通して、学習内容の確実な定着を目指し、校種の接続及び発達の段階に応じた指導方法・評価の工夫を行い、豊かなスポーツライフの実現に向けた児童生徒を育てるための具体的な実践を行っている。そこで、令和3年度と令和4年度の2年間は、「球技ゴール型」の研究を深め、小中高特における「つながりのある学習」の一層の充実を図ることを目指す。

『つながりのある学習』における、「つながり」は、単に教材や領域種目を揃えることによるつながりではなく、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の12年間を見通し、発達の段階に応じて系統化・明確化された学習内容を、「どのように学ばせるのか」について学校段階等間の接続の中で計画的、かつ継続的に行うことにより、学習内容の定着を図っていくことを目的としている。

(4) 研究を進めるにあたって

本県学校体育研究会においては、育成を目指す資質・能力の明確化、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進、体育科・保健体育科学習におけるカリキュラム・マネジメントの推進の3つを研究の基本方針とした。また、この3つを念頭に置き、体育科・保健体育科学習において、カリキュラム・マネジメントや指導方法の工夫を行い、主体的・対話的で深い学びを実現する授業を展開できれば、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することができるのではないかと考え、本主題を設定した。

4 研究の概要(研究構想図)

生きる力

たくましいからだ 豊かな心 すぐれた知性

めざす児童生徒像

『 未来を切り拓く 心豊かでたくましい 宮崎の児童生徒 』

研究の基本方針

- 育成を目指す資質・能力の明確化
- 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進
- 体育科・保健体育科学習におけるカリキュラム・マネジメントの推進

研究主題

生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育む体育科・保健体育科学習
～主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業の創造と展開～

- 小学校部会主題:生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力の基礎を育む体育科の在り方
- 中学校部会主題:生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育む保健体育科学習の在り方
- 高等学校部会主題:生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力を育む保健体育科学習の在り方
- 特別支援教育部会主題:生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育む体育科・保健体育科学習の在り方

研究の仮説

体育科・保健体育科学習において、カリキュラム・マネジメントや指導方法の工夫を行い、主体的・対話的で深い学びを実現する授業を展開できれば、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することができるであろう。

研究の内容

『主体的・対話的で深い学びを実現する授業の在り方』

(1)カリキュラム・マネジメントの工夫

- 球技などにおける、個別最適な学びを実現するための12年間を見通した「学習内容系統図」の作成と工夫

(2)指導方法の工夫

- 球技などにおける、ICT活用の工夫

令和4年度視点説明①

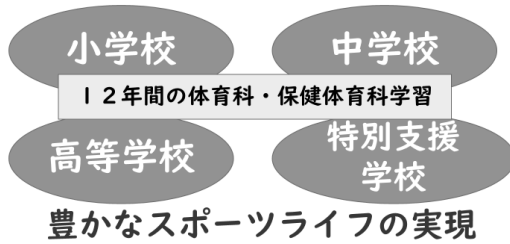
宮崎県全体の研究主題

生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育む体育科・保健体育科学習

～主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業の創造と展開～

今年度の県全体の研究主題としては、「生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育む体育科・保健体育科学習」とし、副題として「～主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業の創造と展開～」と設定した。

宮崎県学校体育研究会が進める研究



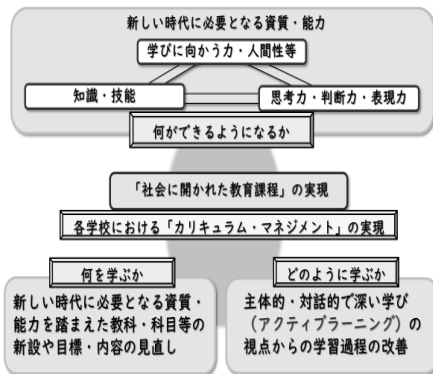
県学校体育研究会が進める研究については、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校における12年間の体育科・保健体育科学習を通して、学習内容の確実な定着を目指し、校種の接続及び発達の段階に応じた指導方法・評価の工夫を行い、豊かなスポーツライフの実現に向けた児童生徒を育てるための具体的な実践を行っている。

つながりのある学習とは

単に教材や領域種目を揃えることによるつながりではなく、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の12年間を見通し、発達の段階に応じて系統化・明確化された学習内容を、「どのように学ばせるのか」について学校段階等間の接続の中で計画的、かつ継続的に行うことにより、学習内容の定着を図っていくことを目的としている。

「つながりのある学習」は、単に教材や領域種目を揃えることによるつながりではなく、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の12年間を見通し、発達の段階に応じて系統化・明確化された学習内容を、「どのように学ばせるのか」について学校段階等間の接続の中で計画的、かつ継続的に行うことにより、学習内容の定着を図っていくことを目的としているものである。

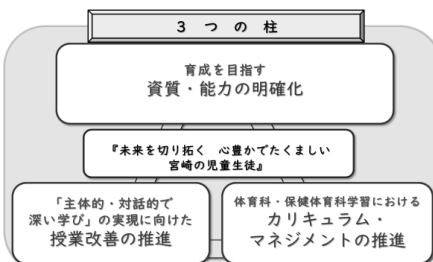
新学習指導要領の方向性



新学習指導要領では、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、新しい時代に求められる資質・能力を子供達に育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指している。また、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現が求められている。

その中で「何ができるようになるのか」、「何を学ぶのか」、「どのように学ぶのか」という点が重要視されている。

【研究の基本方針】



県学校体育研究会においては、育成を目指す資質・能力の明確化、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進、体育科・保健体育科学習におけるカリキュラム・マネジメントの推進の3つを研究の基本方針とし、『未来を切り拓く 心豊かでたくましい 宮崎の児童生徒』の育成を目指し、研究を進めてきた。

令和4年度視点説明②

<p>研究の方向性</p> <p>研究のテーマ</p> <p>「主体的・対話的で深い学びを実現する授業の在り方」</p>	<p>日向地区では、昨年度に引き続き、研究テーマを、「主体的・対話的で深い学びを実現する授業の在り方」とし、研究を進めてきた。</p>
<p>研究の流れ</p> <p>「球技ゴール型」</p> <p>2年間の継続研究</p>	<p>その中で、「球技ゴール型」の研究を深め、小中高特における「12年間のつながりのある学習」の一層の充実を図ることを目指し、研究を進めてきた。</p> <p>昨年度からの2年間の継続研究である。</p>
<p>研究の内容</p> <p>(1)カリキュラム・マネジメントの工夫</p> <p>(2)指導方法の工夫</p>	<p>今年度も、研究の内容を</p> <p>(1)カリキュラム・マネジメントの工夫</p> <p>(2)指導方法の工夫</p> <p>の2点に整理して研究を進めることにした。</p>
<p>カリキュラム・マネジメントの工夫</p> <p>球技などにおける、個別最適な学びを実現するための12年間を見通した「学習内容系統図」の作成</p>	<p>カリキュラム・マネジメントの工夫では、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の全ての校種で活用できる、球技などにおける個別最適な学びを実現するための12年間を見通した「学習内容系統図」を本地区独自に作成した。</p>
<p>学習内容系統図とは？</p> <p>学習指導要領解説の例示を系統的にまとめたもの。 (本地区では「知識及び技能」に着目した)</p> <p>↓</p> <p>小学校から高等学校までの12年間の例示のつながりを一目で確認できる。</p>	<p>学習内容系統図とは、学習指導要領解説の例示を系統的にまとめたものである。日向地区では、「知識及び技能」に着目し、作成した。</p> <p>この学習内容系統図を活用すると、小学校から高等学校までの12年間の例示のつながりを一目で確認することができる。</p>

令和4年度視点説明③

学習内容系統図の活用方法①

学習内容系統図の活用方法①

学習指導要領（12時間）

時間	1	2	3	4	5	6(本時)
①技術の理解						
②技術の習得						
③共通						
④公正						

学習内容系統図の活用方法を紹介①

まず、単元計画を作成する際、該当学年で学習すべき内容を把握することができる。それによって、精選した学習内容を単元計画の中に見通しをもって配置することができる。

学習内容系統図の活用方法②

学習内容系統図の活用方法②

その学年に適した学習内容と評価

「努力を要する」状況と判断される児童生徒への手立て

個別最適な学びの実現

学習内容系統図の活用方法の紹介②

学習指導案の作成においても活用することができる。例えば、日向・東臼杵地区大会に向けて学習指導案を検討する中で、評価の基準を高く設定してしまい、次の学年の学習内容やねらいとなってしまうことがあった。その際、学習内容系統図を使って、各学年の学習内容を再確認し、その学年に適した学習内容と評価に繋げることができた。

その他、「努力を要する」状況と判断される児童生徒への手立てを検討する際にも、前の学年の例示を確認し、段階的な指導方法を取り入れることにも活用でき、個別最適な学びの実現にもつなげることができる。

指導方法の工夫

球技などにおけるICT活用の工夫

指導方法の工夫に関する研究では、「球技などにおける、ICT活用の工夫」について研究を進めた。

効率的・効果的なICT活用

- カメラ機能によるゲームの様子の撮影
- 映像を見ながらの話合い活動
- Google Classroomの活用(高等学校)
- 事前に作成した映像資料の活用

日向・東臼杵地区では、授業の目標を達成するために、各校種で授業の各場面におけるICTの活用方法をこれまで検討してきた。小学校、中学校、特別支援学校では、カメラ機能によるゲームの様子を撮影し、その様子を見ながら話合い活動の実施してきた。また、高等学校においては、Googleclassroomを活用した授業の振り返りを実施してきた。特別支援学校では、生徒の実態に応じて、映像資料の活用を行ってきた。

小学校でのICT活用

ゲームの振り返り → 作戦の選択

研究授業の中でICTを活用する場面の紹介①

小学校部会では、タブレット端末のカメラ機能を活用し、ゲームの様子を撮影する。撮影した映像を活用し、ゲームの振り返りを行う。活動の際は、別に用意した作戦ボードや付箋紙と映像資料を併用して、作戦の選択などに生かすようにする。

令和4年度視点説明④

特別支援学校でのICT活用



模範映像としての活用



運動の選択

研究授業の中で ICT を活用する場面の紹介②

特別支援学校部会では、事前に準備した映像資料(ひなたプログラム)を模範映像として活用する。映像資料を見ながら、本時で取り組む運動をグループごとに選択する。また、ゲームを行う際には、カメラ機能を活用し、ゲームの様子を撮影、撮影された映像を見ながら試合の振り返りを行う。

中学校でのICT活用



ペアの活動



活動の振り返り・課題解決

研究授業の中で ICT を活用する場面の紹介③

中学校部会では、1人1台のタブレット端末を活用し、カメラ機能を使って、ペアで活動の様子を撮影する。撮影後は、別に用意した「コーチングシート」と併用し、活動の振り返りや課題解決のための話し合い活動を行う。また、授業の終盤では、Google フォームを活用した授業の振り返りを行う。

高等学校でのICT活用



トレーニング活動の選択



Google Classroomを活用した振り返り

研究授業の中で ICT を活用する場面の紹介④

高等学校部会では、事前に準備された映像資料を生徒自身で選択し、トレーニング活動に取り組む。また、試合中の様子をカメラ機能で撮影し、試合の振り返り活動に活用する。授業の終盤では、Google Classroom を活用し、授業全体の振り返りを実施し、個人の振り返りと全体での授業の振り返りの効率化を図る。

授業参観の視点①

学習内容系統図の作成は適切で効果的な活用がなされていたか。

授業参観の視点①

学習内容系統図の作成は適切で効果的な活用がなされていたか。

授業参観の視点②

授業の目標を達成するために、授業の展開における効率的で効果的なICT活用ができていたか。

授業参観の視点②

授業の目標を達成するために、授業の展開における効率的で効果的な ICT 活用ができていたか。

指導講評

令和4年11月17日 木曜日 全体会(つながりのある学習)

【指導助言者】 宮崎大学大学院教育研究科 教授 三輪 佳見

- ・ ゴール型の球技では、ボールをどのように運び、ゴールに入れるか、空間を使うことが課題となってくる。
- ・ 球技における空間という視点では、日本コーチング学会によると「物理空間」と「意味空間」に分類される。
- ・ 「物理空間」とはコート等のラインで決められた空間、その他、実際にラインが引かれていないものの、サッカーのオフサイドラインのようにルールで区切られる空間のことである。
- ・ 「意味空間」とは主観的な空間である。ラグビーを例にすれば、ゴールラインが1m先にあるけれども、なかなか進むことができず遠くを感じる場合。また反対に、バスケットボールで非常に調子が良い選手が難しい場所からのシュートも容易に入れてしまう場合などを「意味空間」としている。
- ・ 本日のボールをどのように運ぶかという授業のテーマは「意味空間」を作り出すことに繋がってくる。「意味空間」で重要なことは、ボール操作において時間的・空間的に余裕がある状況を作り出すことである。
- ・ 小学校の授業では、アウトナンバーの状況から攻撃の時間と守備の時間を明確に分け、時間的・空間的な余裕を与えながら授業を展開していた。
- ・ 中学校で求められる内容は、ゴール前の空いている場所をどのように使うかである。広い空間で相手チームのディフェンスからマークされている中で、自チームがボールを持った瞬間に前を向いて、空間を見つけてシュートまで繋がるまで考えさせる。
- ・ さらに進んだ本日の授業の中学校3年生、高等学校3年生の段階ではイーブンナンバーの状況でしっかりと守備が付いているにも関わらず、どうやってスペースを作り出すかが課題となってくる。
- ・ そのような中で、特別支援教育の授業がスペースを学ぶ上で、非常におもしろい提案であった。先ほど、スペースを作るために空間的・時間的余裕が必要であるとの話をした。その余裕を作り出すために色分けしたエリアが示されていた。自身が幼児を指導するときにも色分けしたコーンを示すことで、児童がスムーズに整列をすることができる。今回の色つきエリアのような具体物は非常に分かりやすいものになる。小学校の授業等においても有効なヒントとなる。
- ・ 小学校は陣取り型のゲーム形態であるため、ボールを持って前に運ぶことが主となる。ボール操作については後ろにパスを出す際に必要となるが、後ろにはディフェンスがないため、時間的・空間的な余裕が生じるため良い教材であったと考える。

- ・ 中学校3年生、高等学校3年生はどちらもスペースを作ることがテーマであった。
- ・ 中学校3年生では女子生徒も参加していた。そこでボール操作を易しくするために、あまり転がらず、スピードが出ないボールを使ってスペースを作るプレイに取り組ませていた。また、人数については2対1の状況をつくり、2人で攻撃を組み立てていくという分かりやすい課題であった。
- ・ 高等学校3年生ではフットサル形式での授業展開であった。上手な生徒が多かったので、周囲を見ながらボールを運ぶ状況が多く見られた。
- ・ ICTの活用については、確かに言葉で説明するよりは視覚的な情報の方が理解しやすいことは否定することではない。しかし、あまりにも過大評価しすぎて、動画を見せることで技能が上達するかというと、なかなか上手いかない部分がある。
- ・ 体操競技を指導するとき、自分で技を披露することができない場合など、言葉で説明が難しいような状況では映像を見せるのは効果的である。
- ・ 上手くなるためには見た映像を自分の感覚で翻訳することが大切なことである。
- ・ つながりをもさらに深めていくためには、今回作成している学習内容系統図は非常に整理されている。より実効性を高めるためには、児童・生徒の実態をしっかりと把握することが重要となる。
- ・ 児童・生徒の体力の状況を知るためにスポーツテストを実施しているが、どの単元に関係があるのかを考える必要がある。
- ・ ICTの活用については、昨年に撮影している動きと今年度に撮影する動きを比較する方法もある。さらには、次の校種へ繋げることも可能である。本県では小学校・中学校・高等学校・特別支援教育で体育を考える機会があるので、そのようなつながり方もあるのではないだろうか。